

平成 2 7 年度

全国特別支援学級設置学校長協会
調査報告書

平成 2 8 年 1 月

全国特別支援学級設置学校長協会調査部
協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

あいさつ

全国特別支援学級設置学校長協会
会 長 阿 部 謙 策
(葛飾区立梅田小学校長)

障害者の権利に関する条約が批准され2年間が過ぎようとしています。条約の批准を受け、我が国においても、障害のある児童生徒の一人一人が適切な教育の場において、十分に達成感や満足感をもって学ぶインクルーシブ教育システムの構築に向けての、様々な取り組みが着実に進められています。また、今年の4月からは「障害を理由とする差別の解消に関する法律」(「障害者差別解消法」)が施行されます。学校においても、合理的な配慮の提供が義務付けられ、障害のある子に対しその子のニーズに応じて、最大限の適切な教育をしていかなければならない時代になってきました。昨年の11月には各省庁において障害者差別解消法の対応指針が告示され、文部科学省でも教育の分野に関する不当な差別的取扱い及び合理的配慮の基本的な考え方や、具体例を示しました。また、もう一つの大きな流れとしては、次期学習指導要領の改訂に向けての作業があげられます。新しい学習指導要領の改訂に向けての審議がなされていく中で、通常の学校の学習指導要領に特別支援教育の視点がどのような形で反映されていくか、また障害のある子供たちについて、自立と社会参加を一層推進する観点から、自立活動や各教科の指導内容や指導方法についてどのような改善がなされていくかが注目されます。

このように特別支援教育が大きく変革していく状況の中、特別支援学級設置校の校長として、特別支援教育に関わる様々な課題を解決していくためにどのような対応をしていくべきかが求められています。これらの課題を解決するための参考になるように実施しているのが本協会の全国調査です。昨年度は、各教科等の指導の際に主たる教材となる教科書の活用状況等について調査しました。その結果、ほとんどの小、中学校で検定教科書を採用しているという結果が得られました。今回は、その内容をもう少し詳しく掘り下げて検証する内容のアンケートを実施しました。

方法として抽出調査で、本協会の知的障害学級及び自閉症・情緒障害学級のそれぞれ10%の回答を目標に調査した結果、全体の約9.5%にあたる3537校より回答を頂きました。改めまして各設置校の校長先生方のご協力に対し深くお礼を申し上げます。ここで得られた成果を、インクルーシブ教育システムの理念を基とした共生社会の実現に向けて取り組まれている各地区や各校において参考にされ、特別支援教育がますます充実することを心より願っています。

結びになりますが、今年度の調査につきましても以前より引き続きご協力いただいた、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主任研究員 小澤 至賢様には常に懇切丁寧なご指導ご助言をいただきました。会を代表して、心より感謝と御礼を申し上げます、巻頭のあいさつといたします。

目 次

あいさつ 全国特別支援学級設置学校長協会 会長 阿部謙策

I 調査目的	1 p
II 調査方法	1 p
III 調査対象	1 p
IV 調査期間	1 p
V 調査内容	1 p
VI 調査結果及び考察	2 p
1 特別支援学級の教育課程編成状況	2 p
(1) 障害種別の状況	
(2) 校種別毎の状況	
2 検定教科書の選択状況	3 p
(1) 国語・算数・数学における障害種別の検定教科書の選択状況	
(2) 国語の検定教科書を活用している具体的な状況	
(3) 国語の検定教科書を活用する際、障害の特性等に応じた工夫	
①知的障害学級	
②自閉症・情緒障害学級	
(4) 算数・数学の検定教科書を活用している具体的な状況	
(5) 算数・数学の検定教科書を活用する際、障害の特性等に応じた工夫	
①知的障害学級	
②自閉症・情緒障害学級	
3 ☆本を多く選択できるようにするための方策	10 p
(1) 国語の☆本を多く選択できるようにするための方策（校種別）	
(2) 算数・数学の☆本を多く選択できるようにするための方策（校種別）	
4 一般図書を多く選択できるようにするための方策	13 p
5 検定教科書の活用に応じた要望	15 p
6 検定教科書用の教師用指導書への要望	16 p
VII 全体考察	17 p
資料 1 特別支援学級設置学校の基本情報のまとめ	19 p
資料 2 アンケート調査項目	25 p

あとがき

I 調査目的

全国特別支援学級設置学校長協会（以下、全特協）では、全国の特別支援学級設置学校長（以下、設置学校長）に対して、毎年度、特別支援教育の推進をより一層促すために、全国調査を実施している。

昨年度は、特別支援学級が各教科等の指導の際に、主たる教材としている教科書に焦点を当て、その選択及び活用状況を調査した。その調査で多くの特別支援学級において検定教科書を選択していることが明らかになった。

このことを受けて、今年度は主に全国の特別支援学級（自閉症・情緒障害特別支援学級含む）の文部科学省検定教科書（以下、検定教科書）の具体的な活用状況を調査するとともに、選択が少なかった知的障害者用の文部科学省著作教科書（以下、☆本）と学校教育法付則第九条の規定による教科書（以下、一般図書）をこれまで以上に選択できるようにするための方策を調査した。

調査結果を都道府県校長会における特別支援教育の推進や充実のための提言として活用することも目的とする。

なお、例年継続して調査している特別支援学級に関わる基本情報は、経年変化を見るため、今年度も調査項目として加えた。

II 調査方法

- (1) 質問紙法による調査
- (2) 全特協の各都道府県理事を通して、全国に設置されている知的障害特別支援学級（以下、知的障害学級）と自閉症・情緒障害特別支援学級（以下、自閉症・情緒障害学級）のある小学校及び中学校へ調査依頼した。
- (3) 全特協ホームページへのアクセスにより、調査を回答する。

III 調査対象

各都道府県に設置されている知的障害学級設置校及び自閉症・情緒障害学級設置校から 10%を抽出した小・中学校長

※ 対象地域は、全国 1800 弱の市町村と東京都 23 区である。

IV 調査期間

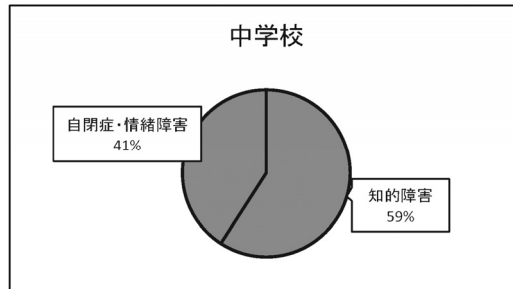
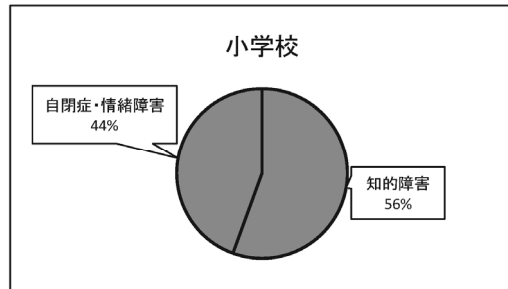
平成 27 年 6 月 29 日（月）～平成 27 年 9 月 4 日（金）

V 調査内容

- (1) 特別支援学級を設置する学校の基本情報（経年調査）
- (2) 検定教科書が選択されている状況
- (3) 国語と算数・数学の検定教科書の活用状況
- (4) ☆本をより多く選択できるようにするための方策
- (5) 一般図書をより多く選択できるようにするための方策
- (6) 検定教科書の活用に当たっての課題と要望及び検定用教科書の教師用指導書についての課題と要望

(1) 障害種別の状況（数は、延べの学級数を表示している。以下同じ）

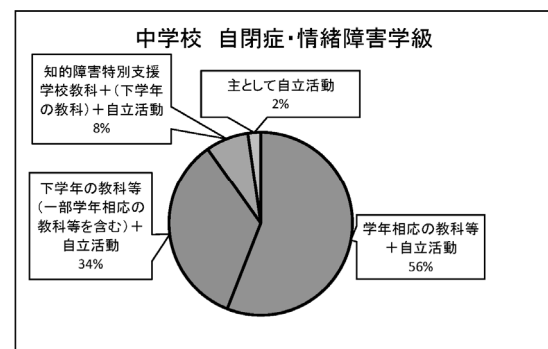
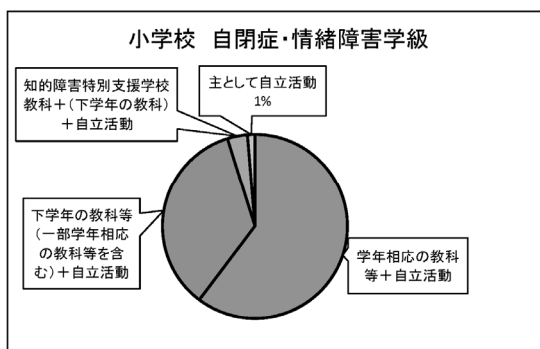
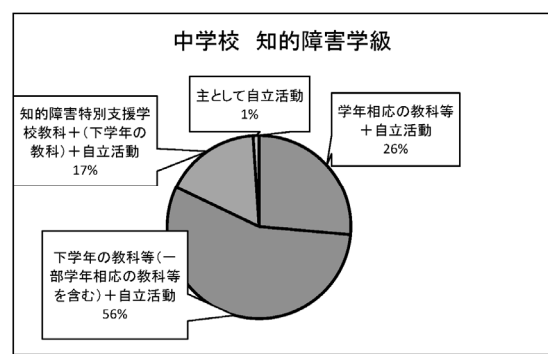
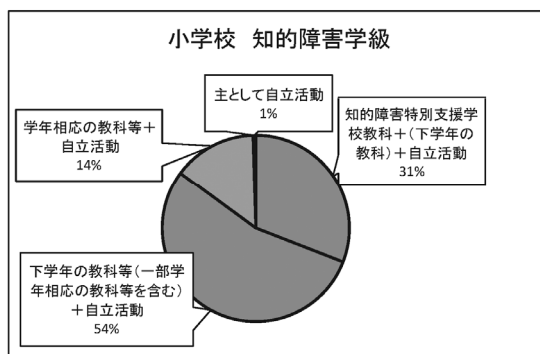
校種 障害種	小学校	中学校	合計
知的障害	1246（56％）	765（59％）	2011（57％）
自閉症・情緒障害	997（44％）	529（41％）	1526（43％）
合計	2243	1294	3537



回答いただいた全国特別支援学級設置学校は、小学校2243校、中学校1294校、小中合わせて3537校であった。この校数は、平成27年度の全国の特別支援学級設置学校のおよそ9.5%に当たる。

(2) 校種別毎の教育課程編成状況

校種	教育課程 障害種	知的特別支援学校 教科＋自立活動	下学年の教科 ＋自立活動	学年相応の教科 ＋自立活動	自立活動
小学校	知的障害	385（31％）	675（54％）	180（14％）	6（1％）
	自閉症・情緒障害	35（4％）	348（35％）	601（60％）	13（1％）
中学校	知的障害	129（17％）	426（56％）	202（26％）	8（1％）
	自閉症・情緒障害	40（8％）	181（34％）	296（56％）	12（2％）



小中学校の知的障害学級では、５５％が主に「下学年の教科＋自立活動」により教育課程を編成している。「学年相応の教科＋自立活動」が約３０％、「知的障害特別支援学校の教科＋自立活動」は約１５％である。

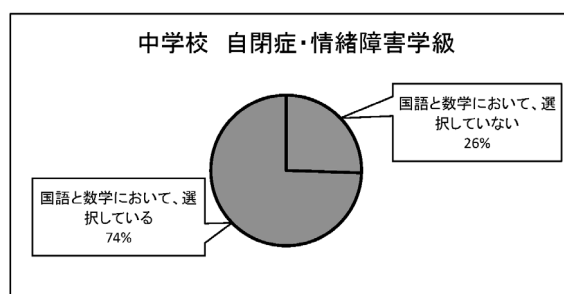
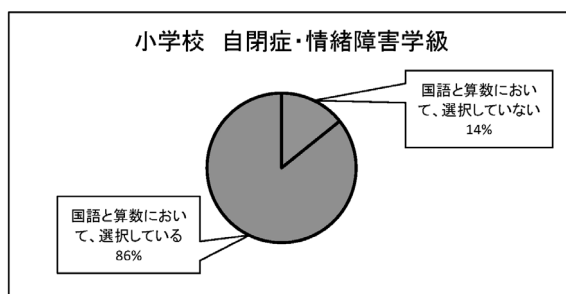
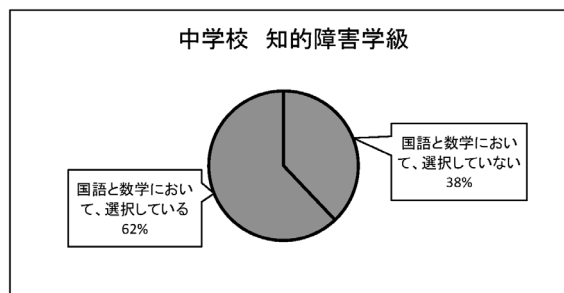
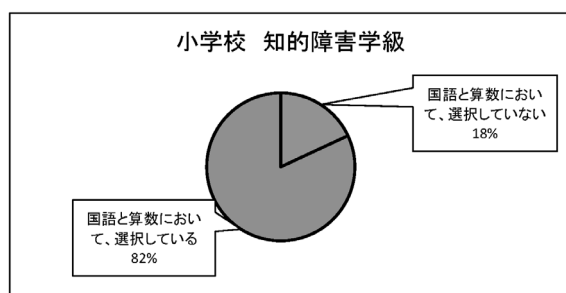
小中学校自閉症・情緒障害学級では、５９％が「学年相応の教科＋自立活動」により教育課程を編成している。「下学年の教科」は約３５％である。「知的障害特別支援学校の教科」は約６％、「自立活動のみ」は１％と共に低い。

小中学校共に障害種毎の特性を十分に考慮した教育課程の編成をしている。

2 検定済教科書の選択状況

(1) 国語・算数・数学における障害種別の検定教科書の選択状況

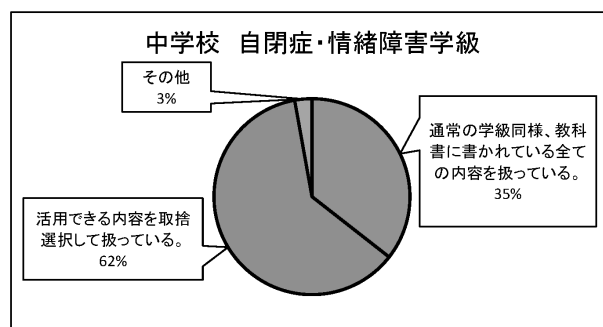
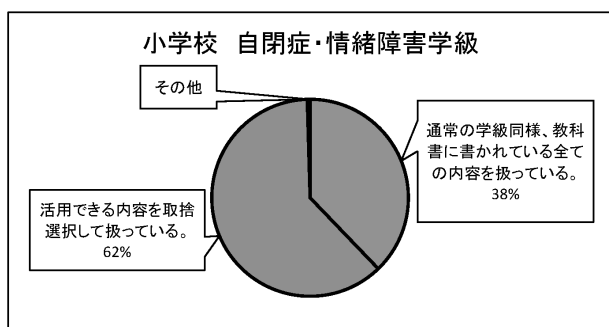
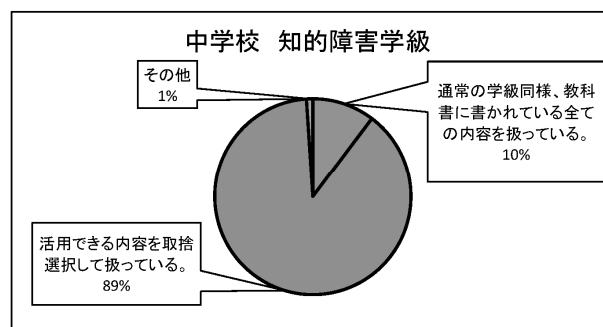
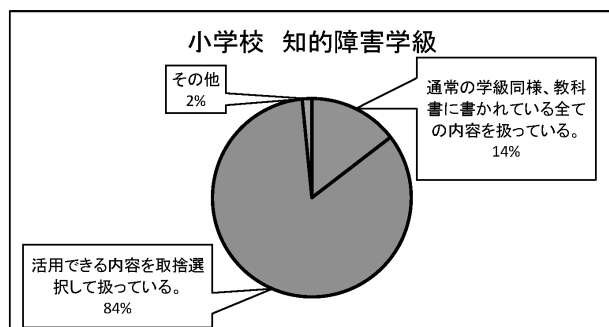
校種	障害種	選択している	選択していない
小学校	知的障害	1021 (82%)	225 (18%)
	自閉症・情緒障害	855 (86%)	142 (14%)
中学校	知的障害	475 (62%)	290 (38%)
	自閉症・情緒障害	394 (74%)	135 (26%)



小学校の知的障害学級、自閉症・情緒障害学級の傾向として、平均８４％が国語と算数の検定教科書を選択している。中学校では、知的障害学級が６２％、自閉症・情緒障害学級が７４％が国語と数学の検定教科書を選択している。

(2) 国語の検定教科書を活用している具体的な状況

校種	障害種	内容を全て扱う	取捨選択をして活用	その他
小学校	知的障害	149 (14%)	859 (84%)	16 (2%)
	自閉症・情緒障害	324 (38%)	529 (62%)	4 (0%)
中学校	知的障害	49 (10%)	423 (89%)	5 (1%)
	自閉症・情緒障害	138 (35%)	239 (62%)	11 (3%)



小中学校共に知的障害学級において、約 85% が国語の検定教科書の内容を「取捨選択して活用している」傾向が見られた。「内容を全て取り扱っている」のは、約 13% である。自閉症・情緒障害学級においても、「取捨選択して活用している」のが小中学校共に 62%、「内容を全て取り扱っている」のが約 37% となった。

□ 「その他」（自由記述）

○子どもの実態に応じた活用

- ・子どもの実態に応じて、全ての内容あるいは取捨選択した内容を活用している。

○検定教科書の扱い方

- ・検定教科書を使用する場合、教科書の内容を全て扱うが、基本的な学習内容のみを扱い、発展的な内容まで学習を広げたり深めたりしていない。
- ・1年生のみ検定教科書を使用し、その他の学年は一般図書を使用している。
- ・下学年の教科書を使用している。
- ・自閉症・情緒障害学級のため、通常の学級と同じ内容で実施している。
- ・家庭学習用として、復習やドリル用として取り扱っている

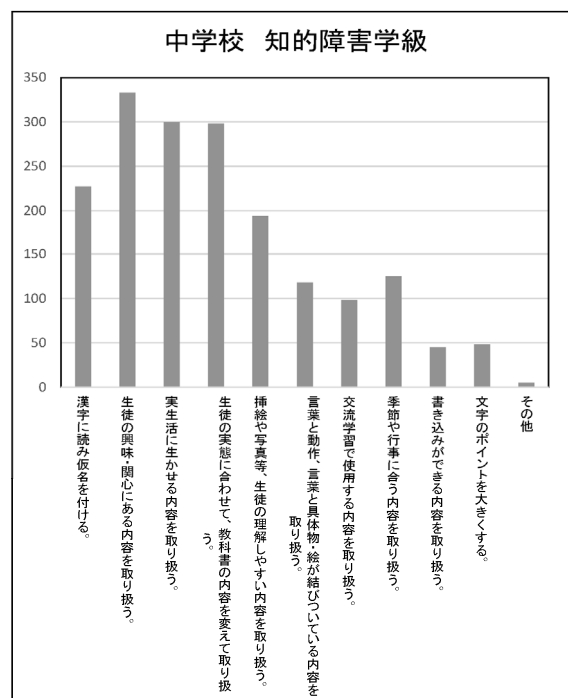
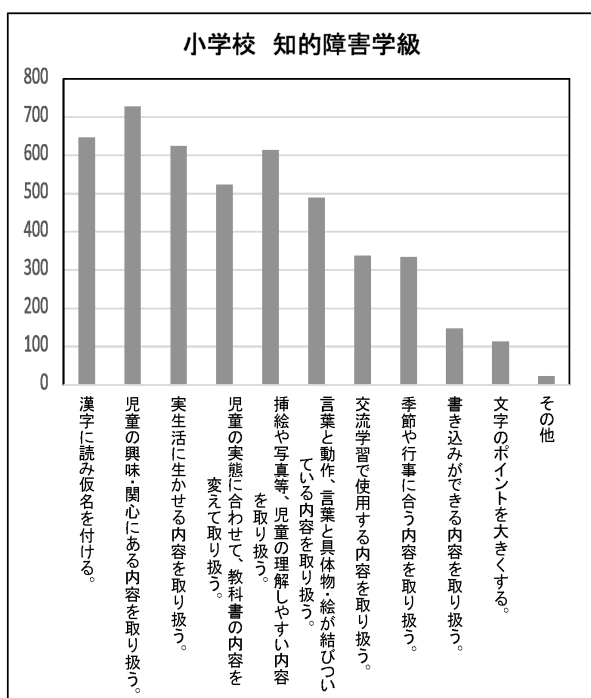
○その他

- ・☆本は、教育委員会に最新の見本がなく、比較して選択できなかった。
- ・新1年生で実態が分からずに検定教科書を選んだが、実態に合わず担任が教材を手作りしている。
- ・保護者の希望で検定教科書を選択している。

(3) 国語の検定教科書を活用する際、障害の特性等に応じた工夫

① 知的障害学級

工夫	小学校	中学校
漢字に読み仮名を付ける。	647	227
児童の興味・関心のある内容を取り扱う。	728	48
実生活に生かせる内容を取り扱う。	625	333
児童の実態に合わせて、教科書の内容を変えて取り扱う。	523	300
挿絵や写真等、児童の理解しやすい内容を取り扱う。	614	298
言葉と動作、言葉と具体物・絵が結びついている内容を取り扱う。	490	194
交流学习で行う内容を取り扱う。	338	118
季節や行事に合う内容を取り扱う。	334	98
書き込みができる内容を取り扱う。	147	125
文字のポイントを大きくする。	113	45
その他	23	5



小中学校の知的障害学級における国語の検定教科書を活用する際の工夫として「児童の興味・関心のある内容を取り扱う」が最も多い。「実生活に生かせる内容を取り扱う」と続く。次いで、小学校では「漢字に読み仮名を付ける」が、中学校では「生徒の実態に合わせて教科書の内容を変えて取り扱う」がそれぞれ多くなった。小中学校共に「交流学习で行う内容を取り扱う」は少ない。

□ 「その他」 (自由記述)

○ 内容の取り扱いの工夫

- ・子どもの実態に合わせて、到達目標を変えて行う。
- ・子どもの実態に合わせて当該学年より下の学年の検定教科書を使用し学習している。

○年間計画の工夫

- ・話す・聞く等、各領域をバランスよく扱えるよう年度当初に指導計画を立てる。
- ・学年相応の単元でも、目標や手立てを子どもの実態に合わせて設定し直す。
- ・子どもの実態に応じて、単元の指導事項に軽重を付けて扱っている。

○検定教科書の内容の理解を促す工夫

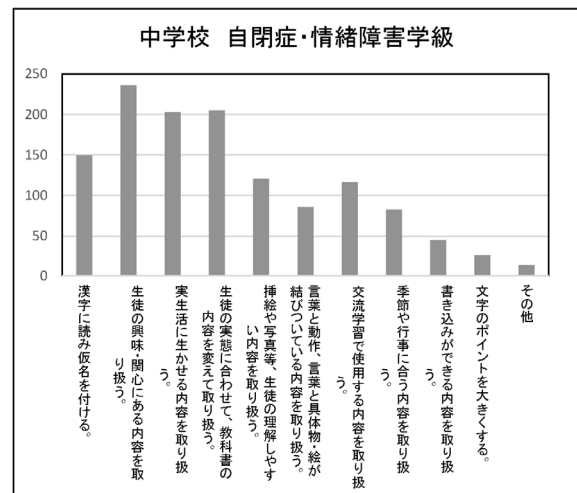
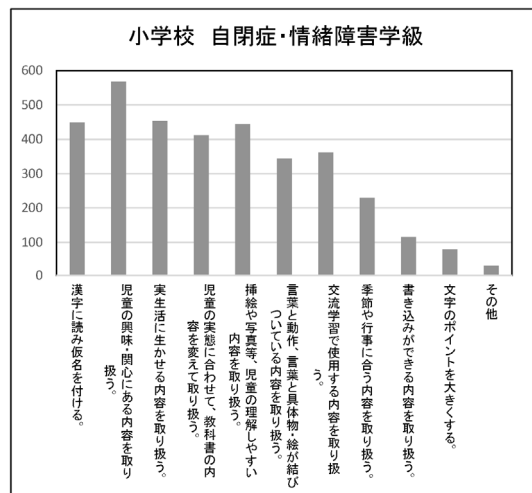
- ・厚紙を適切な大きさに切って余計な部分を隠し、注目すべき部分を目立たせる。
- ・音読する際、集中できるように読む行以外の部分をカード等で隠す。
- ・文字が読みやすいように、文節や単語ごとに分かち書きにしたり、線を入れたり、動作化をしたりしている。
- ・文節ごとにスラッシュを入れ、読みやすくしている。
- ・助詞に印を付けたり、言葉のまとまりごとに線を引いたりしている。
- ・複文を単文にする。本文を活用することで、語彙や語のカテゴリーを教える。
- ・教材文の内容理解を対象児童が日常使い慣れている言葉に置き換えたり、文章を細かく区切って内容を確認めたりしながら読み進めている。
- ・文章や段落が分かりやすいように、再構成をする。
- ・黒板に漢字の読み仮名を書いている。
- ・大型テレビで大きく写したり、デジタル教科書を活用したりしている。

○その他

- ・子どもの実態に応じて下学年の指導事項にレベルを下げて指導する。その際に下学年の教科書だとプライドがあるので学習に対する意欲が低下することから、教科書ではなく問題集などを扱っている。
- ・全単元を活用するが、子どもの特性を考えて学習の進め方を工夫している。
- ・通常の学級と共同で学習を行っている。その際、学級の子どもが理解できるように、T・Tで授業を行ったり、語句の解説をしたりするなどの支援を行っている。
- ・物語文、説明文の読み方が身に付くような指導計画を考えている。
- ・物語文の読解において、登場人物を色分けし、捉えやすくしている。

② 自閉症・情緒障害学級

工夫	小学校	中学校
漢字に読み仮名を付ける。	448	149
児童生徒の興味・関心のある内容を取り扱う。	568	236
実生活に生かせる内容を取り扱う。	453	203
児童生徒の実態に合わせて、教科書の内容を変えて取り扱う。	411	205
挿絵や写真等、児童の理解しやすい内容を取り扱う。	444	121
言葉と動作、言葉と具体物・絵が結びついている内容を取り扱う。	344	86
交流学习で行う内容を取り扱う。	361	116
季節や行事に合う内容を取り扱う。	229	83
書き込みができる内容を取り扱う。	115	45
文字のポイントを大きくする。	79	25
その他	28	13

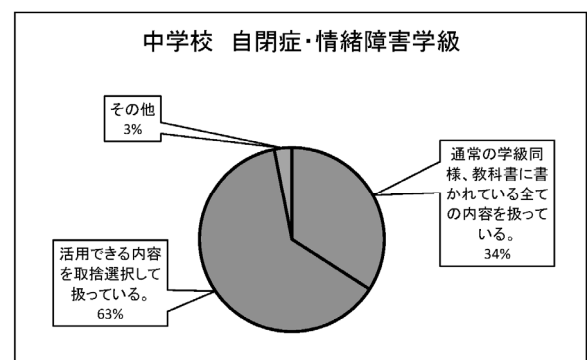
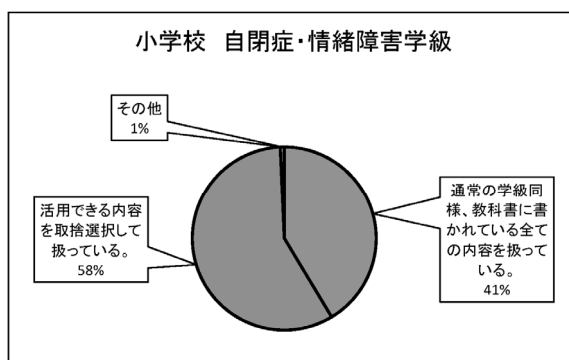
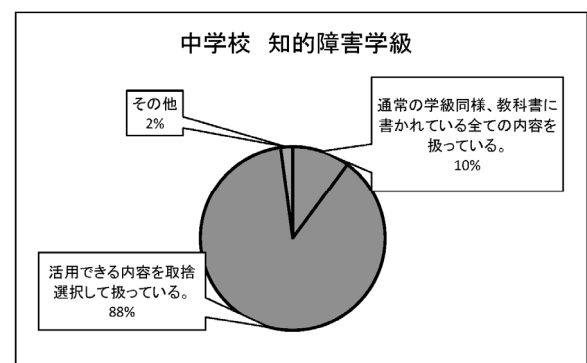
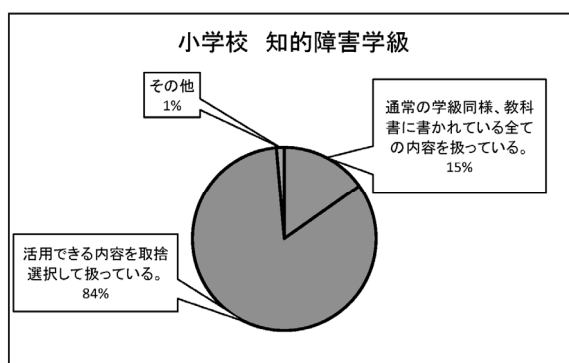


小中学校の自閉症・情緒障害学級の国語の検定教科書を活用する際の工夫では、「児童生徒の興味・関心のある内容を取り扱う」が最も多く、次に「実生活に生かせる内容を取り扱う」が続く。この傾向は知的障害学級と同じである。

小学校では、中学校と比較して「挿絵や写真等、児童の理解しやすい内容を取り扱う」が多い。

(4) 算数・数学の検定教科書を活用している具体的な状況

校種	障害種	内容を全て扱う	取捨選択をして活用	その他	無回答
小学校	知的障害	154 (15%)	844 (84%)	14 (1%)	234
	自閉症・情緒障害	353 (41%)	494 (58%)	6 (1%)	144
中学校	知的障害	48 (10%)	418 (88%)	10 (2%)	289
	自閉症・情緒障害	133 (34%)	245 (63%)	12 (3%)	139



小中学校共に知的障害学級において、約 85% 近くが算数・数学の検定教科書の内容を「取捨選択して活用している」傾向が見られる。また共に検定教科書の「内容を全て取り扱っている」のは、約 14% 程度である。また、自閉症・情緒障害学級においても「取捨選択して活用している」のが小中学校共に約 59% 程度、「内容を全て取り扱っている」のが約 39% 程度となっている。

国語の検定教科書を活用する際の工夫の結果とおおむね同様の工夫をしていることが分かる。

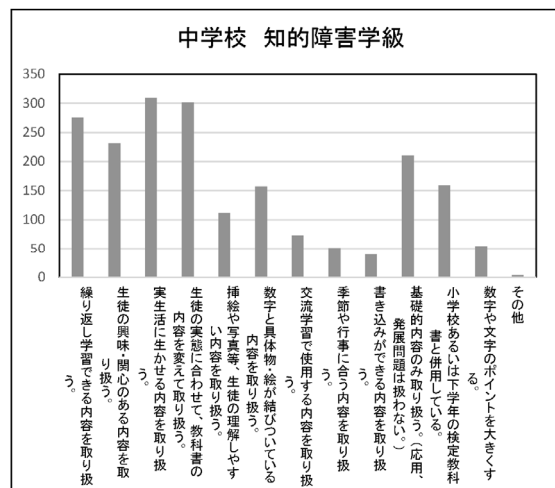
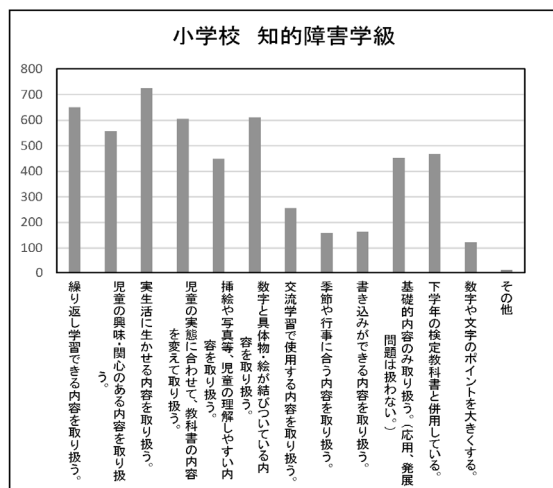
□ その他（自由記述）

- ・子どもの学習状況に応じて教科書が変わる。検定教科書を使用する場合全て学習しているが、基本的な学習に力と時間を注いでいる。
- ・2 学年下の教科書のほぼ全ての内容を扱っている。
- ・下学年の検定教科書を使用し、基礎的な内容を扱っている。
- ・算数に関しては数の概念等、初歩的な学習のみ行っていて、検定教科書は活用できない
- ・子どもの能力に差があるため、活用できる内容を取捨選択して扱っている。

（５）算数・数学の検定教科書を活用する際、障害の特性等に応じた工夫

① 知的障害学級

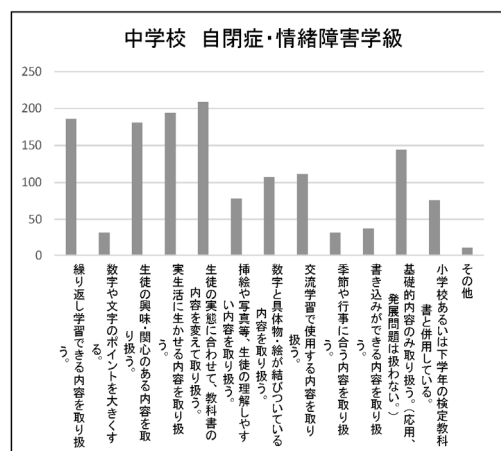
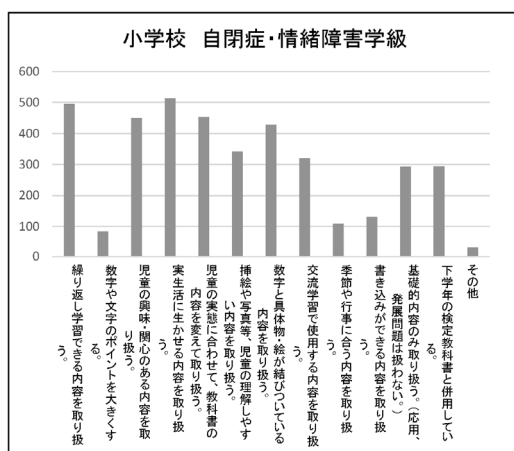
工夫	小学校	中学校
繰り返し学習できる内容を取り扱う。	650	275
児童生徒の興味・関心のある内容を取り扱う。	556	231
実生活に生かせる内容を取り扱う。	724	309
児童生徒の実態に合わせて、教科書の内容を変えて取り扱う。	605	301
挿絵や写真等、生徒の理解しやすい内容を取り扱う。	448	111
数字と具体物・絵が結びついている内容を取り扱う。	611	157
交流学习で使用する内容を取り扱う。	256	73
季節や行事に合う内容を取り扱う。	158	51
書き込みができる内容を取り扱う。	164	39
基礎的内容のみ取り扱う。（応用、発展問題は扱わない。）	453	210
下学年（中学校は小学校）の検定教科書と併用している。	467	159
数字や文字のポイントを大きくする。	122	54
その他	11	4



小中学校の知的障害学級の算数・数学の検定教科書を活用する際の工夫では、「実生活に生かせる内容を取り扱う」が最も多い。さらに「児童生徒の実態に合わせて教科書の内容を変えて取り扱う」「繰り返し学習ができる内容を取り扱う」「児童の興味・関心のある内容を取り扱う」が多くなっている。小学校では「数字と具体物・絵が結びついている内容を取り扱う」「下学年の検定教科書を扱う」が中学校と比較して多い。

② 自閉症・情緒障害学級

工夫	小学校	中学校
繰り返し学習できる内容を取り扱う。	495	186
数字や文字のポイントを大きくする。	84	32
児童生徒の興味・関心のある内容を取り扱う。	450	181
実生活に生かせる内容を取り扱う。	513	194
児童生徒の実態に合わせて、教科書の内容を変えて取り扱う。	454	209
挿絵や写真等、生徒の理解しやすい内容を取り扱う。	342	78
数字と具体物・絵が結びついている内容を取り扱う。	428	107
交流学习で行う内容を取り扱う。	320	111
季節や行事に合う内容を取り扱う。	109	32
書き込みができる内容を取り扱う。	131	38
基礎的内容のみ取り扱う。（応用、発展問題は扱わない。）	293	144
下学年（中学校は小学校）の検定教科書と併用している。	294	76
その他	29	10



小中学校の自閉症・情緒障害学級の算数・数学の検定教科書を活用する際に共通した工夫として、「繰り返し学習できる内容を取り扱う」「児童生徒の興味関心のある内容を取り扱う」「実生活に生かせる内容を取り扱う」「児童生徒の実態に合わせて、教科書の内容を変えて取り扱う」が多くなった。小学校では、「交流学习で行う内容を取り扱う」、中学校では「基礎的な内容のみ取り扱う」が特に多くなっている。

□ 「その他」（自由記述）

○指導時数の変

- ・子どもの実態、特性に応じて、指導時数を変えて取り扱っている。

○視聴覚機器の活用

- ・ICT、デジタル教材等を有効に活用している。

○実際に扱う際の工夫

- ・ドリル等で基礎的内容を理解させてから、検定教科書を扱う。
- ・一人一人の特性に合わせできそうなレベルの問題で自信を付けさせている。
- ・学習内容をまだ充分理解できないため基礎的内容に重点を置いて取り扱い、発展問題は児童の理解度によって扱うものを選ぶ。
- ・四則計算に重点を置き、その他（時間や量など）は一通り学習するだけにとどめ定着までは目標としない。実生活や復習等ゆっくり身に付ければと考えている。
- ・当該学年の内容を基本的に取り上げているが、割り算やかけ算の筆算など場面によっては、下学年の内容を復習させている。
- ・教科書の内容は一通り指導する。同じ内容で分かりやすい数字に直したり、指導の順番を入れ替えたりする等の工夫をしている。
- ・個々の能力に応じ、応用発展問題を扱ったり、補充学習に活用したりしている。
- ・数学的な考え方等を指導する際に活用している。
- ・挿絵だけでは難しいことも多く、教具等具体物の操作も活動に取り入れている。
- ・必要に応じて電卓を使用している
- ・筆算などは、特別のシートに問題を写して、そのシートを使って解かせる。

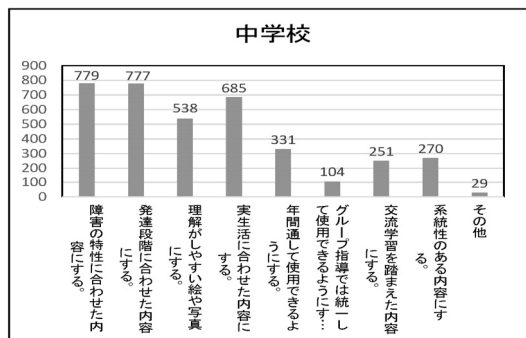
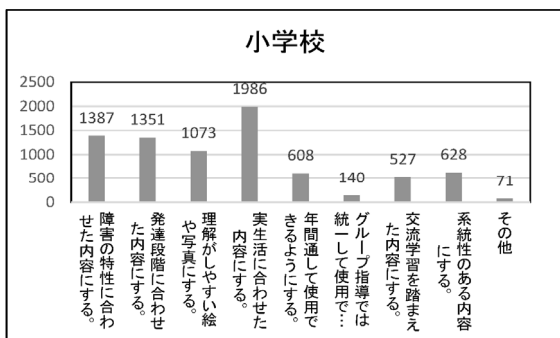
○その他

- ・子どもの実態（学年・障害の程度・交流学級への参加）にかなりの差があり、同じ教科書での指導が困難なため、担任が自主教材を準備した方が、指導しやすい。

3 ☆本を多く選択できるようにするための方策

（1）国語の☆本を多く選択できるようにするための方策（校種別）

方策	小学校	中学校
障害の特性に合わせた内容にする。	1387	779
発達段階に合わせた内容にする。	1351	777
理解がしやすい絵や写真にする。	1073	538
実生活に合わせた内容にする。	1986	685
年間通して使用できるようにする。	608	331
グループ指導では統一して使用できるようにする。	140	104
交流学习を踏まえた内容にする。	527	251
系統性のある内容にする。	628	270
その他	71	29



小中学校の特別支援学級が共通して多く方策にあげているのが、「障害特性に合わせた内容にする」「発達段階に合わせた内容にする」「理解がしやすい絵や写真

にする」「実生活に合わせた内容にする」の4つが多くあげられた。特に小学校では、「実生活に合わせた内容にする」ことが多くなっている。

総じて、国語において、☆本に記された内容を充実させていくことにより、選択する数が増えてくることが推測される。

□ その他 （自由記述）

○☆本の種類について

- ・ ☆の数を増やしてもう少し難易度を上げた内容にする。
- ・ 教科毎の☆本を一冊にまとめて、採択できる幅を広げる。

○検定教科書との関連性について

- ・ ☆本の教師用指導書に、学習指導要領に示されたどの学年の指導内容かを明記する。このことによって、特別支援学級との交流や通常の学級で支援の必要な子どもの指導の参考になる。

○細かな系統性のある内容

- ・ 検定教科書よりも、細かなステップの内容にする。
- ・ 各段階での指導例が少ない。小刻みのステップアップできる内容が望まれる。

○☆本の様式について

- ・ 教科書に書き込みができるようにする。
- ・ 繰り返し使用できる内容にする。

○挿絵や文字のサイズ等について

- ・ 現状でも内容（挿絵なども）はよく工夫されている。
- ・ 最近取り寄せ内容を確認した結果、予想以上に内容的には、優れている。選択の際にその☆本の内容が周知されていれば、選択の余地は増える。
- ・ 内容や挿絵等に子どもたちが魅力を感じるもの、実生活に結びついているものによりなるとよい。
- ・ 子どもの興味を引く挿絵や内容、文章表現にしてほしい。国語の☆本は、文章が少ないので、国語の学習には物足りない。

○選択の方法について

- ・ 子どもの実態に合わせるため、検定教科書と☆本を両方選択したり、学級に各学年1冊配布されたりするとよい。

○☆本の周知について

- ・ 市町教育委員会に見本を置いて、周知を図る。
- ・ ☆本の内容や存在を知らない職員も多い。見本を回覧したり、特別支援教育の研修会で取り上げたりするなど、幅広く周知する方法を工夫すると良い。

○☆本に関わる研修の必要性

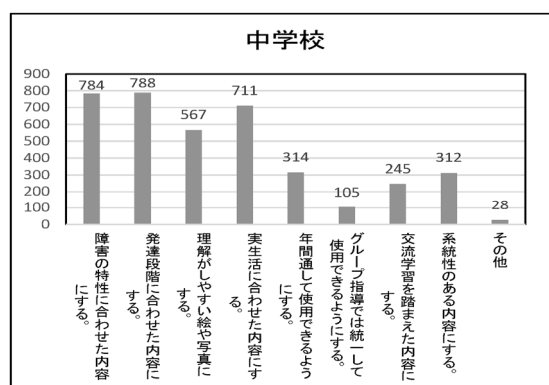
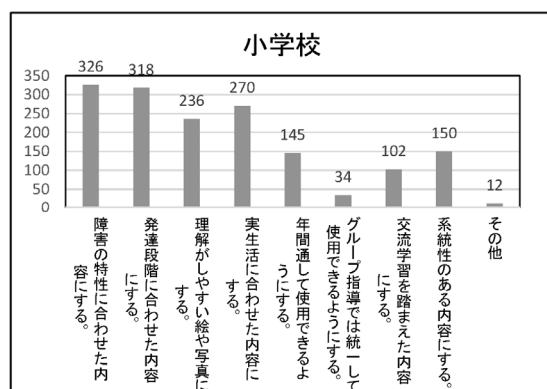
- ・ ☆本の具体的な活用例の提示等、教員の専門性を高めていくとよい。
- ・ 教諭の中でよく理解できていないので、☆本を見る機会と選択を検討する機会があればよい。
- ・ 保護者の理解が図られるよう、☆本についての情報を提供する

○その他

- ・ 児童生徒の状態に応じて多種多様な教科書が必要だと考える。副読本的な扱いとしてインターネットでダウンロードできるようになればありがたい。
- ・ 年間指導計画の時数に対応していける量的内容にする。
- ・ 複数学年や実態の差に対応した内容は難しい。

(2) 算数・数学の☆本を多く選択できるようにするための方策（校種別）

方策	小学校	中学校
障害の特性に合わせた内容にする。	326	784
発達段階に合わせた内容にする。	318	788
理解がしやすい絵や写真にする。	236	567
実生活に合わせた内容にする。	270	711
年間通して使用できるようにする。	145	314
グループ指導では統一して使用できるようにする。	34	105
交流学习を踏まえた内容にする。	102	245
系統性のある内容にする。	150	312
その他	12	28



小中学校の特別支援学級が共通して多く方策にあげているのが、「障害特性に合わせた内容にする」「発達段階に合わせた内容にする」「理解がしやすい絵や写真にする」「実生活に合わせた内容にする」の4つが多くあげられた。この傾向は、国語の☆本の結果と同じである。

国語の☆本への方策との違いは、「系統性のある内容にする」についての回答が多いことである。算数・数学の教科書の特性を反映したものと思われる、

算数・数学においても、☆本に記す内容を充実させていくことにより、選択する数が増えてくることが推測される。

□「その他」（自由記述）

○☆本の種類について

- ・さらに進んだ内容の☆本がほしい。
- ・各單元ごとの教科書があってもよい。
- ・年間指導計画の時数に対応できる量にする。

○検定教科書との関連性について

- ・領域によっては、学びやすい内容もあるので、検定本と併用しながら活用できるように、学級1冊ずつの配当が、検定本と同様にあるとよい。

○繰り返し活用できる内容

- ・四則計算など繰り返し指導する内容は、練習問題がもっとあった方がよい。

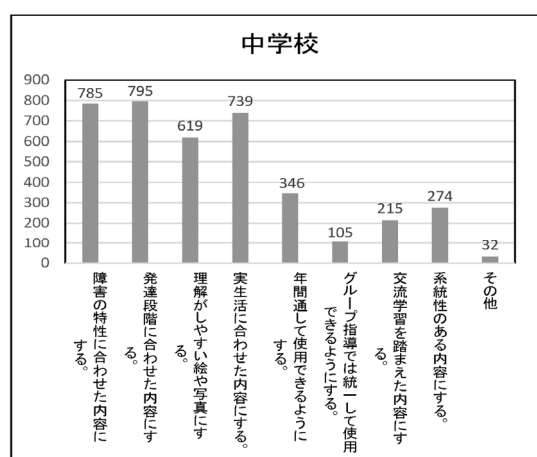
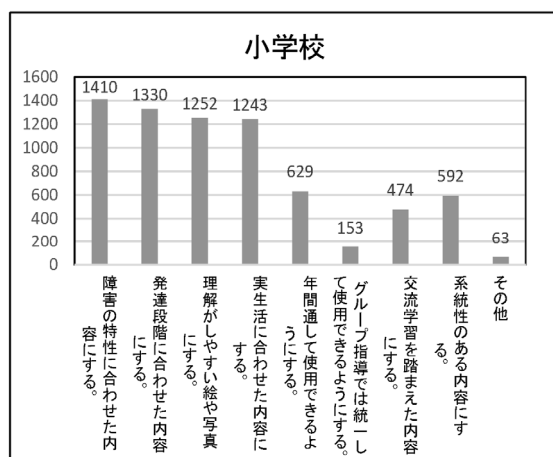
○☆本の様式について

- ・教科書に直接書き込みができるようにする。
- ・具体物による指導例が多様であるとよい。
- ・繰り返し使用できる内容にする

- ・障害の特性に合わせた、タブレット教材やパソコンで使える資料があるとよい。
- 挿絵や文字のサイズ等について
- ・時代に合った内容や挿絵だと活用しやすい。
- ☆本の周知について
- ・教員が☆本を見て検討する機会を増やす。
 - ・国語と同様、最近取り寄せ内容を確認した結果、予想以上に内容的には、優れていると感じた。☆本の内容が周知されていれば、選択の余地は増える。
 - ・保護者に☆本についての情報を提供する
 - ・補助教材の充実と特別支援学級担当者への啓発が必要である。
- 算数と数学の☆本の取り扱い
- ・小学校の選択の際、中学部用の数学の☆本を選択できるようにする。
 - ・☆のレベルがあがると「数学」になっていて、小学校では使いにくいので、同じ内容でも「算数」表記のものと使いやすい。
- ☆本を活用するための研修会について
- ・☆本の具体的な活用例の提示等を学ぶ研修会により教員の専門性を高めていく必要がある。
- その他
- ・子どもが興味をもち、グループ指導をするときに、発達段階の差に対応できるような学習内容があるとよい。

4 一般図書を多く選択できるようにするための方策

方策	小学校	中学校
障害の特性に合わせた内容にする。	1410	785
発達段階に合わせた内容にする。	1330	795
理解がしやすい絵や写真にする。	1252	619
実生活に合わせた内容にする。	1243	739
年間通して使用できるようにする。	629	346
グループ指導では統一して使用できるようにする。	153	105
交流学习を踏まえた内容にする。	474	215
系統性のある内容にする。	592	274
その他	63	32



小中学校の特別支援学級が共通して多く方策にあげているのが、「障害特性に合わせた内容にする」「発達段階に合わせた内容にする」「理解がしやすい絵や写真にする」「実生活に合わせた内容にする」の4つが多かった。

この傾向は、☆本の国語、算数・数学への方策に関する調査結果と同様である。

□ 「その他」(自由記述)

○ ☆本の種類について

- ・ ゆっくり学ぶ子どもには、もう少し段階を踏んだ指導法が分かるようにする。指導の展開を別冊にすると年間を通して利用しやすい。
- ・ 学習のねらいが明確となるような一般図書があるとよい。
- ・ 軽度からボーダーの能力の子ども向けの一般図書を充実させてほしい。
- ・ 多様に採択できるよう、教科書一覧に掲載される一般図書の数を増やす。
- ・ 生活年齢相当の内容を理解しやすい文や絵で表した一般図書が増えるとよい。

○ 検定教科書との関連性について

- ・ 検定教科書または☆本と併用できるようにする。
- ・ 検定教科書に合わせて、基礎・基本に重点を置いた一般図書があるとよい。

○ 挿絵等について

- ・ 一般図書は文字の大きさや文字の数などは工夫されているが、挿絵が今の時代にマッチしておらず、子どもの興味をあまり引かない。カラーにしてほしい。
- ・ 発行年度の古い本も多いので、最新の書籍が選べるようにしたい。

○ 選択の方法について

- ・ 1冊だけ選ぶことは難しい。1年間に選択できる冊数を増やす。数が増えないと多様な対応ができない。
- ・ 一般図書のタイトル、出版社名だけでは はっきりした内容が分からず 選択するのに勇気がいる。インターネット等で内容の情報を得ることができると、その児童にあった内容の本が選びやすく、選択しやすくなる。

○ 一般図書の周知について

- ・ タイトルだけでは内容が分かりにくいので、HP等で一般図書の内容がもう少し分かるような解説を入れる。
- ・ 一般図書を見る機会がなく、選択を検討する機会もない。図書一覧のようなものだけでなく、見本のようなものがあれば選択しやすい。
- ・ 選択する時に、カタログのタイトルだけで内容が分からないので、活用例や「こんな児童に最適」といったコメント等が載っていると選びやすい。

○ 一般図書も含めた全ての教科書の無償給付について

- ・ 検定教科書か☆本、一般図書かの選択ではなく、必要であれば全て無償で給付できるようにする。

○ その他

- ・ 一般図書は学校教育の中での活用を想定して作られているわけではない。そのため、検定本や下学年本がふさわしいと思われる。一般図書は参考図書として使用するのが望ましいと考える。
- ・ 採択の時期が6月では前の学年の学習も始まったばかりで子どもの実態がつかみにくいため、秋ごろにする。
- ・ 採択の手続きを簡素化(変更の手続きを含む)していくこと。
- ・ 内容の解説や活用例等の資料があると選択しやすい。

5 検定教科書の活用に当たっての要望

○活用の際の工夫

- ・ 3年生の理科は身近な動植物や科学的な現象を分かりやすく示されているので、子どもの実態に応じて検定教科書が使えるよう工夫できるとよい。
- ・ 1から6年までの児童を、また、障害の程度に差がある子どもを一斉に指導するための方策を具体的に提示されているとよい。

○様式や内容について

- ・ 検定教科書にも「ルビがあるもの」など支援の段階が数種類あるとよい。難しい漢字にルビを付けたり、難しい用語に解説を付けたりするなど工夫してほしい。
- ・ 行間があいているとルビを振りやすい。ルビ入りの教科書ができるといい。
- ・ つまづく子どもへの手立てを豊富に示すとよい。
- ・ 特別支援学級用の検定教科書ができるとよい。
- ・ 現学年で使う教科書の教材を用いて平易な課題で編集してあると使いやすい。
- ・ 検定教科書と同様の装丁で、内容が少し減らされたものがあるとよい。
- ・ 検定教科書は以前に比べて特別支援教育の視点を取り入れた構成になっているが知的障害の子どもであれば「知能〇程度の場合は、〇〇の☆ほんの活用が有効である」など手引き書が記載されていると判断の手助けになる。
- ・ 拡大した教科書のように全体的に絵・図・文字を大きくし、漢字には読み仮名が振ってあると活用しやすい。文字が小さいのでできる限り大きな活字にしていきたい。
- ・ 文字認識に抵抗のある児童には、文字は大きくゴシック体で見やすくしてほしい。
- ・ 図や絵、イラスト等が効果的にあると分かりやすい。
- ・ レイアウト（構成）がすっきりしていると、分かりやすい。
- ・ 文字を書くことに抵抗を感じる子どものために、書き込みができるとよい。
- ・ 課題に対するまとめがすぐ分かるようにしてほしい。
- ・ 書き込みできる内容量を増やすと、もっと活用しやすくなると思う。
- ・ 挿絵、写真等たくさんあると分かりやすい。
- ・ 見開きのページに多くの内容を掲載しない。
- ・ 生活に根付いた内容、活用の方法がわかりやすい内容にしてほしい。
- ・ 言葉の解説や復習のページがあると振り返りができる。
- ・ 情報量（文字数）が多すぎるので、厳選していただきたい。
- ・ 各学年の学習内容の理解について実態把握ができるプレテストがあるとよい。

○デジタル教材について

- ・ 教科書よりもPCやタブレットなど、ICTを活用した授業をするためにも、障害の特性に合わせたデジタル教科書があるとよい。
- ・ LD等の障害も重複している場合があり、行間や文字間を変更できるようなデジタル化がなされると助かる。
- ・ ICTを活用した事例を取り上げると教材研究の幅が一層広がると思う。

○選択について

- ・ 交流学級で学習することも多いので、同学年の教科書を提供している。特別支援学級に在籍する児童生徒には、交流等を考えると検定教科書と☆本（各教科で1冊ずつ）を全員に配付してほしい。
- ・ 教科書選択の時期が早く、子どもの成長を十分に加味できていない。もう少し遅く選択できるようにしたい。前年の6月に来年度のものを発注しなければならないタイムラグの問題を無くしたい。

6 検定教科書用の教師用指導書への要望

○特別支援教育の視点のある教師用指導書の必要性

- ・特別支援教育の視点に沿った具体的な支援方法が書き加えられると活用しやすい。
- ・各単毎に特別支援の子どもへの配慮や多様な指導方法を掲載してほしい。『支援の必要な子どもへの対応』の留意点をより詳しく記載してほしい。また、障害や特性に応じた事例や展開例等を紹介してほしい。
- ・ユニバーサルデザイン化するための留意事項の記述があれば、通常の学級においても担任による特別支援を要する子どもたちへの配慮が適切に行われると考える。ユニバーサルデザインの視点から、LDや発達障害の特性に応じた教科指導の工夫が紹介してあるとよい。ユニバーサルデザインの授業が展開できるよう、資料、指導上の留意事項などの記載が豊富にあるとよい。
- ・教科における系統性を考え、特別支援学級あるいは習熟度が低い子どもに、当該学年で十分時間をかけて指導した方がよい内容について明示したり、補的な内容を指導書に掲載したりするなどの配慮があるとよい。（軽重をつける目安にもなる）
- ・年々、特別支援教育の内容（ニーズ）が高くなっているように感じる。個別の支援計画に沿って取り組んでいるが、担任だけでは、個の障害の実態で日常の教育活動に苦慮することが多い。教師のレベルアップに繋がる指導書等が望まれる。
- ・障害の特性に合わせた指導書があるとよい。視覚から入ることが得意な子にとっては、理解すべき内容が写真や挿絵等を用いて文字数が少ない本は意欲も高くなる。同じように学習障害（LD）の子どもたちの各つまづきに特化した教科書等も増やすとよい。
- ・子どもが学んでいる教科書の内容に到達できていない場合に、どの学年のどの内容に戻って学び直しを行えばよいかを指導書等に示しておくとう便利である。
- ・軽度の知的障害がある子どもが増えている。理想は、障害の程度に合わせた教科書だが現実的には難しい。現在の☆本は、境界線上にある子どもには易しすぎる。また教師用指導書については、特別支援学級に特化したものがあるとありがたい。

○新たな教科書について

- ・☆本とは別に、検定教科書の内容で、全ての漢字に読み仮名がついている特別支援教育用の教科書があるとよい。
- ・☆本と検定教科書のほかに、軽度の知的障害の子どもに対応できる教科書をつくってほしい（例えば、検定教科書の内容から基礎的内容のみが載っていて、絵や図、写真等が分かりやすく示されているものなど）

○☆本について

- ・☆本の指導書については、特別支援教育の経験年数に関わらず、分かりやすい内容に編集してほしい。
- ・☆☆☆の内容より少し進んだものがあると使いやすいと思う。
- ・☆本は、全ての特別支援学級設置学校（全学級）に配備したい。
- ・インクルーシブ教育システムが進む中、交流学习の機会が多くなると考えられる。しかし☆本をもらおうと「通常の教科書」が受取できないという現状では、☆本は使いにくいところがある。両方ほしいという声が多い。
- ・各校に☆本を1部ずつ配布し、いつでも見られるようにしてほしい。
- ・☆本の冊数は、各教科1冊に限定せず複数冊も可能になるとよい。

○その他

- ・過去に文科省から刊行されていた「日常生活の指導の手引き」や「生活単元学習の手引き」等の改訂版の刊行を望む。そのことにより、領域・教科合わせた指導の形

態と生活に結びついた教科別指導の関連等の理解が深まるであろう。

- ・ 下学年の教科書を利用した学習の方が望ましいと思われる子どもの場合でも、なかなか保護者の理解が得られず難しい場合がある。
- ・ 検定教科書と☆本との中間程度のものが良い。基礎的な読み書き・計算が具体的な絵や図で学ぶことができると良い。
- ・ 特別支援学級に在籍する子どもは、障害の状態だけではなく、年齢や学年の幅が大きく、発達の段階や行動の特性も様々である。このような子どもに対して、適切な指導をするためには、多様な子どもの実態を十分把握した上での指導計画作成となる。そこで、教師用指導書内に特別支援学級での活用事例等があるとよい。
- ・ 特別支援学級の子どもが一番身に付けなければならないのは、社会性であるため、実生活に結び付けて、学べる内容を加味してほしい。
- ・ 特別支援学級の子どもの実態に応じ、適切な教科書がもっと自由に採択できる環境があると良い。採択の際も現場の状況に応じた多くの選択肢があってもよいのではないだろうか。

Ⅶ 全体考察

1 教育課程の編成状況と国語と算数・数学の検定教科書の選択状況の関連性

主に下学年の教科＋自立活動と学年相応の教科＋自立活動による教育課程の編成をしている知的障害学級は小中平均で約 83%、自閉症・情緒障害学級では平均 93%であった。その結果を反映するように、国語と算数・数学の検定教科書を選択している学級は、知的障害学級では小中平均で約 72%、自閉症・情緒障害学級では平均 80%であった。

国語・算数・数学の授業においては、選択した検定教科書等を活用しながら、当該学年あるいは下学年の内容を取り扱っていることが推測される。

2 国語と算数・数学の検定教科書の活用状況

国語、算数・数学の検定教科書を活用している小中学校の 72%程度の知的障害学級が、また 80%程度の自閉症・情緒障害学級が、教科書の内容を取捨選択して扱っていることが分かった。

小中学校の自閉症・情緒障害学級は、知的障害学級よりも教科書の内容を全て取り扱っている割合が高かった。

多くの特別支援学級における検定教科書の内容の取り扱いの傾向としては、障害のある児童生徒の発達段階や学習の習得状況、障害の特性等を勘案して、国語、算数・数学の指導計画に合うもの取捨選択していることが分かった。

3 国語と算数・数学の検定教科書を活用する際、障害等の特性に応じた工夫

国語の検定教科書の工夫では、知的障害学級が「実生活に生かせる内容を取り扱う」、自閉症・情緒障害学級では「児童・生徒の興味関心のある内容を取り扱う」が最も多かった。自閉症・情緒障害学級では、基礎的な内容の取り扱いと下学年（中学校は小学校）の教科書との併用が多く見られたことが特徴的だった。

算数・数学の検定教科書の工夫では、知的障害学級と自閉症・情緒障害学級共に、「実生活に生かす内容を取り扱う」が最も多かった。知的障害学級では、基礎的な内容の取り扱いと下学年（中学校は小学校）の教科書との併用が多く見られた。

国語と算数・数学の検定教科書を活用する際、教科の特性と障害種別の特性を加味した工夫がなされていることがうかがえた。

具体的な活用状況に関する「その他」に、国語で物語や詩の音読、漢字学習等に活用されていること、算数・数学で基礎的な学習を主に取り扱っていることの記載が多くあった。このことから児童の生徒の実態に応じ検定教科書の扱いを工夫していることが分かった。

障害の特性に応じた工夫では、教科書をそのまま使用するのではなく、単元の指導計画の軽重を付けて設定し直したり、文字や文章、数の理解を促す工夫をしたりしていることが分かった。

4 ☆を多く選択できるようにするための方策について

国語と算数・数学の☆本に関して調査をしたが、どちらも教科に共通した方策は次の4つである。

- ① 実生活に合わせた内容
- ② 障害特性に合わせた内容
- ③ 発達段階に合わせた内容
- ④ 理解がしやすい絵や写真にする

上記の①から④の方策からも、☆本の内容を子どもの発達段階や障害特性等を十分に反映したものにすることが必要であることが分かる。また、挿絵や写真など、文字や数を補完することも求められている

反面、「その他」の自由記述の中には、最新の☆本を実際に触れた会員から「よくできている」との肯定的な評価の声もあった。多くの校長や教員に対して、☆本の存在を周知するために、本を見る機会を増やしてほしいとの要望もあった。

また☆本と検定本の単元毎の関連性を明らかにすると活用が図られるのではないかと意見もあった。今後の大きな期待を寄せていることを実感できた。

このように、☆本を今以上に選択できるようにするためには、改善を求めることと合わせて、広く周知する方策を検討する必要性も明らかになった。

5 特別支援教育の視点を加えた検定教科書と教師用指導書の必要性

現行の検定教科書と教師用指導書の改善策として、特別支援教育の視点での記載を求める声が多くあった。特に特別支援学級の子どもの障害の特性に応じた支援や指導だけでなく、通常の学級に在籍する発達障害の子どもたちへの支援や指導を想定した記載を盛りこむことについて多くの声が寄せられた

さらに、ここ数年、通常の学級に在籍する発達障害ではない子どもも含めた指導、支援する方法として注目され、全国各地で研究実践されているユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業の在り方についての要望も数多くあった。

特別支援学級を対象とした検定教科書への要望や課題の調査であったが、発達障害のこどもやグレーゾーンのこどもたちへの指導や支援も視野に入れた回答が多くあった。

次期小中学校の学習指導要領の検討している部会で協議している発達障害の子どもに対する特別支援教育の在り方と深く関連した課題が明らかになった。